

俳諧正語抄

全

863  
82



19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53







向ふ小い出さるるまはく儒佛神の大道も皆  
同くさるるく俳諧のなをも亦志く集さるるや  
りらわく曲節紙毎にあゝぬ姿と庶幾さるる  
も出らるるさるるく形を教示さるるや  
汝等もあき心乃駒は鞭打く千里のまきまを  
をり思ひぬ邪路より迷ひ果て大津は陥りて  
正途はまきまをさるるく如きいそく津の俳諧は  
んやさるるく愛よさるるくさるるく今日  
の俳諧も

楽へさるるく書れり末後く小柄くさるるく  
さるるく具を福し樂し人とた小柄くさるるく  
のさるるく庶くは梓小彫て同志の人くさるるく  
んさるるくおの好めさるるく家の者をもさるるく  
ひさるるく小物せんる家洲よりさるるく  
時のまをさるるくさるるくさるるくさるるく  
海は話さるるく早晩上木く我に魂よさるるく  
わさるるくさるるく集りさるるくさるるく附句のいさるるく





鄙の戯言と梓りて他邦は鬼雲の小冊さく  
凡そよまぢしつらんより海さのぬへりさりとて  
かろひのひとくへおあひひけ書もいふあまふ富  
貴よまふへりし富事とけひの貧賤よまふへりて  
貧賤とけひし富事とけひの他は海はほひて  
物よまふ着もけひし富事とけひのあまふへりて  
あまふへりて富事とけひのぬへりさりとて  
何れれと世のこゝ業志とけひし富事とけひのあまふへり

早あまふへりてあまふへりて二十七回忌よりあまふへりて  
こゝい同志の社友よまふへりてあまふへりて共よ  
力を助る橋店の便りを求むあまふへりて人のりたあ  
出羽の色とあまふへりてあまふへりてあまふへりて  
凡そ大邦よまふへりてあまふへりてあまふへりて  
あまふへりてあまふへりてあまふへりて今此年忌より  
あひて諸子の志も同へりてあまふへりてあまふへりて  
あまふへりてあまふへりてあまふへりてあまふへりて



人々油ち釜の用ふもせよつらむのつれ助  
やもふしと父の言もむらうしとひら  
つはさの寸忠もあつてあ郷を圍れ  
窓下よ其よりいさく書つらむそい  
かきつらむあ祭ら

文政己丑れま



俳諧正語抄

羽鶴岡

泉郷音園琴而按

芭蕉翁を昔伊賀の國藤堂の家よはてて武と  
以て業とせりさると忠の爲よ録と捨義の爲よ  
髻と落してより佛頂禪師よまゝとひて禪り又  
熟したり其始を桃地黨の姓松尾氏よて桃青と  
號よ深川よ住庵よ事既よ久し窓前よとせ紙  
と括て春秋の榮枯と観よ世の人をより芭蕉庵



の翁と呼翁り又其名自然うり事と賞して  
ふらう芭蕉と名乗たふて翁若き時より和  
奇とよくせり季吟と師として武江の素堂と友  
と一暮り一夜秋雨の蕭颯たる六昧骨よ  
我分して鹽と雨ときく衣巾と此句は庭中の  
芭蕉と拈却して我号よを得たり嘗禪師と  
茶話の詞あり曰道心と求んとする者も市中  
の惶忙と飽て幽谷と隠れん其初は飽りのハ又其

終は寂寞と飽んされし今日の是非は交りな  
ら其是非ははるれとて自在と道と得んあ  
此俳諧は拈て名利と厭んる志ありと此故に  
禪と和奇とを合て今の正風躰の名を得たり  
故翁と前句と多くは皆親相の句也

正風躰とのふ事正と其本心也風と姿なり  
幽玄と我吟魂の拈ふ所なり我本心の正直より  
是と姿よといひありは竹の一葉の風



六  
は翻りて萩の下葉れ露の裏してさかかろの糸引  
夕暮より月小解く物ま幽玄うして平生  
よひとまのあつる業さふも一つとして能諧あわ  
ぬをりて禪よ一僧問曰何ううう是佛性答曰芦  
華半輪の月此一句幽玄うして正見の人あ  
らんかゝる法身の佛性を知まき也又問何  
ううう是平生の智答曰長床よ飯あり粥ありと  
此一句平生心あり只風雅を正也うう我本意う

て唯の人れきくの事ゆふと能諧とまゆへ一涅  
槃經よま平等心是菩提とも見んをうり  
風雅とま人せれうう天より得るるうり此故よ  
愚るる人とのよともおのつう花と愛一月と既  
事と知り其せん時と能み倫と和け世の人  
情と通達して雲井の憂と志りても食の樂は  
志は近來に能諧ともうりて刹心  
あはぬ偽ともうり曲節と號してあはぬ能言と



好むも故翁の心意よりいひ道徳よ志の人あき  
 と憂ひて翁も他譜より古人ありと歎きたり  
 詞は花と飾りて心は實なきと唐人も誠を  
 巧言令色多辯を君子の大は悪むなり常の立  
 交りも言葉の曲りしんを始りかゝるきいふに  
 むろしき辨舌はうらさ記事ありは曲節と云  
 事古来よりふきうもいひ一卷れ肉二三を  
 こととひうん好んでとらふもあはれ其前句す

ようておのつうせもれと知へ音曲の節ハ  
 くせしふも一くは曲の有ふもあはれ他譜よ地  
 とふも同一心まり唯流水のく安らふ成紙  
 才一とせり一卷の骨肉とふるあましく其動靜  
 緩急を見まかふ事ゆく表裏といふと禮より  
 序也序破急也破ハ人の許へゆきよ着座より  
 世礼もあはれいひさ終夜隅も目れか  
 らまらうと礼の和まれあはれん浮世のさうき





数くもと念んこそ圓まりきうれ是と表と  
いひうらとひ名残とひ立帰とひきさふれ放逸  
あふん禽獸の交よむとひさふ紙おのく膝立並  
しへ序の心よ立ゆるとひな意うれ此故は俳諧  
は禁句と別白懐ひ魚

發句は始中終あり始終の句法あり故翁を始  
中終の句より中比より始終の句法は取扱へり始  
といふと上の五文字より天より中七文字を人也

終と云ハ韻の五文字地よかこぞれや

發句の心得は月花と愛まはれとも念着まら事  
あふれ飽まて花と花して終まを白雲は心と終ま  
るれる也是と一句の變化とも俳諧の少くともいふ  
成へり風雅と理とを各別と知へり俳ハ 確のすへ  
不より俳の考此句確のまへ不よりといふを理より  
て下部の口おしと云とるへ俳の考と風雅よりて  
作者の骨折不也かくのくくまら付一言一カ句よ



して美語教句よあぬきなり  
切字のり古来より十八字に定まる説もあはれ  
蕉門よき曾て其さくさへく切を断也といふ  
意よて其意と切其ま茶と切といふ事也意の切  
口合の切といふる是等もたのつら備りぬ也  
知らるへー中の切といふと五七五の間へて小とを  
入らるるへー挨拶切といふと座句のみ文字に  
能動くといふるへー

發句ハ其位の備りともまりとを分別をへー是  
死活よて定るへー題の教句奇仙百韻の位差  
別をへー題の縦横といふる縦を堅ちり昔より  
和奇よ用るる花鳥風月の定まるるといふ也横とを  
麵棒摺小木の俗といふけぬと花鳥風月と俗語よ  
るして疵付るるなうれ也横を各列うして洒  
落とね外も任へーと也  
服之主の意よく教句よ對一兼の應とら





よりと人の名別は挨拶の心を用ふる事も及び  
才三を轉句也前二句内外動靜と見定て變化  
を盡し才三揃いと云はぬ句もあはれ平句も  
あはれ能く其姿情と辨知りへし揃りのまいつれ  
まも上へ廻して轉動せしむる不肖と知へしされハ  
小てらんゆれし杯古來より定むるも亦系の残り  
たるを用ふる也才三と云へて上五文字は一句の全稱と  
びるへし是と上五文字は重き字を用ふる教あり

四句自古來より強くまろくつふるも才三揃りも  
亦系の御音とつけく是と四句目もびる故也各別  
句意と揚る事ありれども

五句目と一卷の緩急も定む也全稱此一句了  
究ると知るへし

六義の事風と云は其國其所の風俗なり賦と云  
見ると所の風俗とありのまも亦正直よとい出ると也  
比と云物よさるるして亦思ふるまも亦何と事と







ても文は夏より多くなりん死は風雅の終るれ  
は其風情を忘るる風人の常の樂といふを  
天地の變化人間の盛衰をれは春秋の榮枯を面  
白く人間の盛衰を感慨あり人せれて死せんと  
ハ更は益あり老少不定ありて無常の迅速な  
るこそうらむるを死の至来せん我人而  
取の外今やうらむるを思ひよらざるは  
くは去の夕は至へははるく昔を顧るる

昨日をうらむる迷ひとあり今日を又明日の爲り  
迷ふ悲と樂と往つて止時あり限ある命  
と以て限なきを皆妄想ありて是を  
る事一つもなす杜少陵の詩も人間万事皆非  
ともあり士農工商乃隔もなく又と宗旨の撰ひも  
なくそれらの事業といふものも心此風雅を  
達して浮世の是非を念着せしめて名利といふ  
菩提の心も亦と也後世とも遠く尋求る



まも及び今日座卧の中は在りて唯風雅の扱ひ  
一ツよて悟入らるる魚きさるる也蝦蟇荷葉よりて法華  
と漣一蜩蟬黄樹よ鳴て正覺を唱ふらるるといへば  
意と知らるる人の松風も水の音もあはるる園をさん  
口よ親想と言つてあはるる婆娑のるる心の  
満足らるる貪り望るるもさくみくまうて変化れ  
理よ疎らるるひく世常れ速らるるを辨て操去も  
き離らるる詩と志らるる釋して其志と述る

の事やされは其念のわのひきさるるて他の妄念  
妄想の生らるるるるるる悪趣の種もさくまうて  
詩と三百篇のれとも畢竟ハ思無邪の一言に  
き離らるるや

問曰何是拈華微笑の一句答曰思無邪又摩  
訶止觀とる心よ親とれとも心よ着とれハ邪ととも  
見えゆる風雅の大事よおいてハ志らるる心よ着せ  
は又善のも着せは悪のも着せはして其大道よ



至るへしと也禪は山居の僧を問曰汝入定の付心何  
事や吾若者とといふ蠢動皆入定より無き  
いふ草木皆入定答曰始の入定の付有無の心と  
又曰又曰有無の心と見むと何ぞ此山中は入て  
行動は若しむ是則翁の是非よりせて道了  
推初よりの大なるん

翁一日略焉して柱に倚て曰風物ハ寂ハ淳ハ  
る雲の〜風は隨て一回ハ皂狗とあり一回ハ白

衣と成て共は其止る所と志しは是去来因縁は  
任て他諸は皆滅るきるといつり禪は僧来りて  
礼を問曰面前は立者も何人ぞ答曰風は任て  
来る風は任て去る鏡は是は示して曰了るして  
不了る道々として不道々是則不任の及也又  
孔夫子の語はこれと用れり則行ひこれと舎れり  
則藏るとあり去来因縁天命は任せたり也人  
多くハ他諸ははかりりれて他諸は着るる所は是然



以て伎藝と覺え人よめやうやゆりやある名利  
よをり却て邪智となり他の是非と謗るるを  
意よあゝ人よ知れて更よ益なり他諸大悟  
の後速よ他諸と忘るへ一他諸と知りて能人情  
よ通達し是非よはかりれきして変化自在るるを生  
死も又安うん祥よ不謂生やまよ似て集る死や  
水よ似て迷よ去といつるハ則風雅るり五老井ハ  
没期よ下よたより死ぬるめれるる思ひよ上

よも死ハ糞上よ也と尿糞の壺よ打破して去り  
晋子ハ骨の曉さむしきりくさくすくよ去  
秋の榮枯よ一生の速るる事を知り水枝ハ書て  
見より消ししり果を芥子の花と一生の虚實  
往來も此一句よ反古と消し果て去りもけいの  
花のりらきき風雅のよ揃あゝん是等の人を  
死よ至るゆへ其風雅ハ既よ勤るると云へ  
翁或時其角と識て曰己う長よ不るへく人の



顔と云へり物いへる唇をく秋の風此白と  
得て其角一也他の是非といふ人ともり

俳諧を唯思無邪也禅も無思悪無思善是

佛性ともいへり世人唯狂言綺語との覺へて

風雅の本意を去り人或人問曰何と俳諧の彼

初より致しか言曰此道に至らんともは一艸

一木とも他は自らへりあまひくせりんめ

心は替りそれ苦樂を辨へ人の心と亦心とも

君の心と以て吾心ともさといて不孝不義の

者あらんや花の夕れ陸雲の朝乃蜻蛉も心と

通して其哀れを知りてよく朋友もむつまへ

孔子ハ信ありとのまへり他の心と以て亦心とも

こと曾子も忠恕ともいへり佛の教は大悲心とも

も此かともあへり

風姿風情といふも風情を心より信より風姿

體物に感して口へあへりりりり風姿といふも



也されハ唯口よらうり句とつゝゆるも本心誠  
らうらんハ偽よそ邪也人として信ふけきと多  
法よむなり一其心よ真あゝく祢も佛も感應も人  
きらうり意心の風雅句よ顯して姿らるれハ風姿  
風情一粹らうり情を天理らうり其本心並らるれハ句も  
亦並一其情其曲らるれハ句も亦其曲らるらん故又  
句作の正並らうりと本意とも教らうり何ぞ曲節  
と好へらんや

一卷の運び抑揚頓挫と云ハ四季意およひ雜乃  
連綿也天地よ陰陽あり山よ榮枯あり水よ浮沈  
あり又人よ動靜血氣ありて一身自在流通せらる  
や一又壯老よ比して句といはん壯ららん祢ハ並  
よ花やうよ老とびらん祢よ哀憐閑寂とせよ  
して終さいと要と云へ  
戀よ上中下のさぬあり終ふあり其幽實と志ら  
されハ徒らうらへ一ある清歌よ 樂一三ハ夕歌



棚の下涼し男をてくら女を二布して又 思ふと  
ハ汁け飯と喰さして折箸添て出さるをさう  
かくの如の姿を能潜解して正並よえあつた  
りる魚一鬼幽霊化物狐狸の如附合跡よま  
くは是皆怪力りして語へくは動静して實  
よ取扱ふハ己其化物よ迷ふといふへ  
釋教の附合跡よ大切なるへ能く大悟さへ  
前白佛といふんよ小善の功德を以て附合時ハ實よ

佛意と知らる成へ一 問曰一切藏經功德ありや  
答曰世功徳又曰何れ故よ供養よ答曰汝有  
眼うらたよ又一切の經經破古紙よ一 佛法を  
唯せよあつた

松風とくして涼しき秋の月  
終佛よをぬきよあつた  
是白れおろそ替れ米のや  
是等れ附合よて大方工支さへ一 松風よ吹れよ





ら秋の月と詠ふる一念地の預ひのなれはおそく  
其心よてをづくハ佛とて彼と志めて附るもの  
三句目ハ平けは取らして志も其念一変と附る  
なり不用不捨の附合よて有は着らるゆれよ  
サ眼と以て是と捨せよ着らるゆれよ有眼よ  
て是と取高ふゆれハ是と抑へ退くゆれハ是は  
進め捨らるると捨ひ用らると捨つかくのあらは  
一卷の俳諧有世の中より出て念着らるもの畢

竟ハ今具是是非ハ執着らるるを教へ  
或人の曰菴門の俳諧ハ何の爲ハ修まらや言曰此  
俳諧と以て心自在ハ修らるれ今日世間の通用  
ハ直く遠くハ佛性も至くハ法くハ世間とらる  
ハ唯我といふゆれハわらうて五欲肉を盛らる  
其愚らる者ハ金銀と貪り中人ハ名をむさや  
上人ハ徳をむさる是皆变化の理と志らる  
あらう物始終ありて常住成るゆれハ



春夏秋冬と移變ありて六十年終る二万日ありて  
るは沅湘日夜東流れ去りて愁人の為よ留る事  
志しきくも世に限ある命を以て限なき世をむさ  
ぶる事我とのみのよおとやうなり事なり一念  
強悪に凝りてかこゆりて適善とさくとも善に  
うつし悪と知りても敵ま得るる変化の理よ  
疎きうぬ也形を煩惱の爲に得るれども心を不來  
虚靈うてうけなきなり移るる儒うて

是と天理とも本性ともいふ禪とを佛性とと一へ  
沐浴とを神明の本体ともいへて風邪を其本体より  
流れ出て真なる物るれは善法は通達して其理よ  
宵くるるま一人間一生は三十六句は終るる知へし三  
世も老く死るへくはきのよきと去今日を現在也  
明日は又未來うていかに生死も知るはされ今  
日の哀樂よふも忘れぬ怒り腹立ちり此ゆゆつ  
らひまてふも昔も昔もなき家なるるる去の因縁と

冊





いへー此ちうん時ハ明白也又かこやうるまーちよ  
交うて六ヶ交時をたよ向い右のるを去れ忘るへ居  
不起下は皆るを去有現を去十界ハ我一日の初動よ  
して皆具しより出る息ハるを去也入息ハ現在より  
出る息の二度鼻の穴へ入るを去る念も又初動の  
しーまの外より物の觸来りて動るを去る有るを  
も心と動るへうん莊子昔江淮に船と浮て釣は  
樂しまんとする時樓船の漂ひ来りて其船よ南

ア既よくたうんとくうは莊子怒りて鋒を揮て  
是と見らるは彼船よ人あり風の自然よ来れる也是  
より虚舟の二字を得て終は怒りと志のめり人  
を以て虚舟とあり一風の子く其心されと更よ  
逆もくうのうんし喜怒哀樂もよ久しうへうん  
其始有終あり物く其始る時よとく其終を悟る  
へ進者ハ必退く盛りの速よ衰ふ樂よあり時ハ  
たのしみの娑婆へなれたりと観し若しき小居る





時をくろくき要波(あ)出(う)りて教(し)へり美(う)りて  
時(とき)く削(く)るは流(なが)れ去(い)り風(かぜ)心(こゝろ)よ吹(ふ)くも終(つひ)よ又(また)静(しず)まる  
况(いは)や有(あ)りてんそ久(く)しかりん  
俳諧(はいかい)をあまうらよ口(くち)よ斗(と)唱(な)ふるものよつゝ心(こゝろ)よ  
此(こ)るよ達(た)し今日(けふ)れ人情(にんじやう)よ通達(つうたつ)して是非(しはい)変化(へんげ)自(みづか)ら  
をまうらハ(は)一(ひと)勺(すく)れ俳(はい)あはれも家(いへ)高(たか)才(さい)と翁(おきな)とのこ  
向(む)くもされんた(た)く口(くち)よ今(いま)言(い)妙(めう)句(く)と他(た)も出(い)はるも  
不(ふ)慈(じ)不(ふ)孝(こう)よして己(おのれ)の邪(よこしま)智(ち)よ不(ふ)くも物(もの)の辨(わ)けぬく  
物(もの)の喜(よろこ)れも知(し)るは己(おのれ)今(いま)今(いま)死(し)う見(み)んと物(もの)い  
まひらんよの名(な)圓(ま)るをる半(はん)を楳(ま)の下(した)は  
犬(いぬ)の鼻(はな)の色(いろ)香(か)とあ(あ)らう等(らう)等(らう)一日(いちにち)れ我(われ)行(ゆ)動(どう)ハ  
皆(みな)俳(はい)諧(かい)之(の)朝(あ)のむく起(た)り目(め)とま(ま)らうく(く)その雲(うゑ)と  
詠(よ)めて立(た)小便(せうべん)をい(い)ふよ世(よ)の愛(あい)句(く)やう(う)らや水(みづ)よ  
臨(ま)んで口(くち)と嗽(うす)顔(かほ)を洗(あら)うてか(か)の様(さま)花(はな)よ目(め)の涼(すず)し  
きよ不易(ふいち)の眼(まなこ)よあ(あ)はれやされんそ(そ)終(つひ)日(ひ)外(ほか)よ  
立(た)ぬは(は)きよあ(あ)はれは(は)庭(にわ)のよ(よ)折(お)折(お)まりて(て)み器(き)を(を)



小樂一きハ才三の變化こひくのぬくやれハ一日乃  
我事業是ハ才非ハ有て志も其是非ハ迷ハ  
して俳諧の首尾を終るハ一或時其角ウウ  
足あぬ亭まよと一と新酒ハ翁此ウと見て汝も  
既ハ風雅の魂を得たりと答たまへりハ其角ウ  
生質唯ウの曲る事と好んでさひ一き念ま  
さりハ巧言と捨てまゝの平生ハ落れし初末  
たのもし記とゆへ一終ハまゝ老井ウウハ一十歳子

も小粒ハありぬ秋の風此ウと聞て既ハ俳諧の骨  
髓と得たりとのこまづハ是ハ家智ハ不こハ  
風情の寂一きを答たまへりハ 蚕まゝハ馬の尿こ  
枕ハ 道の辺れ木揺まゝハ答れり此二ウハ  
翁の作りして其場其時の自然也唯正並りて  
更ハ曲まハ一義ハ風雅の信有ハたハ士ハ奴ハ  
さゝりハ其君と恨るハ變化の俳諧うして志も  
忠義と守るハ一能此念至れハ士農工商それ





くの業は疎くは勤と己う懃して更は倦る  
たつらん六祖の骨折も確は念のあつといふ大悟き  
へきや心青雲は拵んで三千界は渡るへしみ倫の  
體は備えて死に至るまで堅固なれど是非自  
在うして非道うらむと誓まひ去來因縁は任  
まらぬを是と俳諧の石とハゑる

翁を常は杜陵の詩の伐木丁々山更幽と云ふと  
稱してといふも此悠遠はあつとのたまひ又長嘯

奇は 遁出の焼却の船子家よまこおろくた  
かり咲つていと圓へし奇と以て風色と是は宿  
へしものまよむむさし地八月の入へき山もま  
まより出てまよふこそいれ此下の夕ハ理屈めで  
更は風雅うし尾花の末よかりまよふといふと  
風雅うして理屈うしこそ是等のさうひよくへ  
辨へ知へし

翁昔肥後の山中と誠あり付み十とくられ男乃





それう婦とおや—きうそのお新とおろ—て坂中  
よ休ひ居うり女の男の苦と—あ—ひ男の女と—  
る者翁をくよりて云くらありの人よや大衆  
よこそとありたれハ男のつる賤いむうみの山北洞  
より日毎く夫婦新と負て城下へ賣う—  
其日の糧と求て日暮れハゆり終夜佛恩と悦  
ふお他の意もわく山中よ芳く時ハはくとそし  
空の雲とる—け樂—き事ハ翁もたたま—

といつて翁此云義にめて流ひ門人よも物語られ  
る—さハ富女の—やひやうありも妬あ—くおそ—  
く傾城のうつう—きも偽りちあ—く口惜む—  
中く賤の女よこそ誠の—りるき妹脊をあれ  
いよく感—流—あ—ん戲—れやうよ似—れ  
る新き極うれを書付らりよう—たき書よ—ん—  
翁—とせ毎月うり陸奥新脚と預て裁法へ—  
つれ—う—津とやん—い—石のある寺小





立寄て此寺よ知喜の人此添書おしりよ宿成  
乞願つゝ旅の疲れを言ふ雨風は吹破らるる  
影もあざぬかりと主の僧物陰は窺ふて  
よみくや思ひらん宿旅のきよかりハ翁は  
とるき風情よて佛前よ一礼して立出給へる昔僧  
さも引とめて俳諧の上手うらやみ愛うてた  
少く致すあハ翁安き間の事よと筆とり志め  
て書付給へるの數多よ及ア翁良大きは賑た

しく引まじりせらるる翁良の中なるを減は時こそ  
あれ秋の日は長く山端近く暮るかゝるよ  
宿借よへくともきよなを用の振舞よこそ  
賑立らる時翁門前れるは腰けらるる翁良を制  
してまた極の心底よてハ翁脚の一筋も覚束な  
くハ初思ひまぬる日よりけされ本の下よ一筋を  
ゆ一固縁よ任せて翁脚よき覚悟をよハやハ  
折よこそいハ佛説の言恩よこそまれば安楽



の哀も我身よふれて他道の大道よと入るき也其  
と宿せぬわりの心と教の誓ゆる信達の心と人  
も心も各別ちなり大節は臨んで奈集へくは遠次よ  
ま能く顛沛も能くもくも見ゆれと杖引  
ちうくま出活あり折く竹風といふのわく當め  
氣くせ茅屋も休むいたまといふくハ翁曰  
内志有くくも流状も有る方とむまく  
さておよ一敷と明さんといふれわゆるく笑へゆれ

迎もなるべき筋なぐハ姑の主れ軒の流まふても立  
ぬーたきよーやされらぬ井風園ていへ安きる  
也幸我菩提寺うれといふやまといふさあひらる時  
石鉢の水ともつらう汲うけてそちんと洗ひて佛  
前の側は安座へ居へ一間の次は曾良の畏りた  
るも極尋常の人とも見へるこも此教住僧  
恥と忘れて扇面と出へ翁は讚とを一時翁等と  
とりて 関三寶是三界置一本唯一心 涼とを





たつつちやとも忘りたまよ 文月や六日も常の夜  
よを他人のふも此時るるへー奥羽の杉脚よ  
尊良と供し経つるる尊良の中質をたしきゆま  
同ましろうんいうさ由岩頭よ倒れ死んよたやけく  
かい志やくして去留ふるふさうさうさうさう彼う勇た  
る紙たのそ経つるるや

始翁と毀り歌たるやうも彼はありされも終よ  
を己くう方より優求て慕ひられハ眼を忘れて其人

とむくーちやとも経るよう翁能潜と勤て終よとん  
ふいと忘れさうより此なるる達し経つるあん孔子  
れ曰るむと以て怨よ報るるいふるへー今の人能  
潜の利口を以て却て邪智とさうーや風雅の人能  
あまらり他の善悪と論して人を知ふ此能よ変化  
自在の塊よ至りて以後速よ家能潜と忘るへーとん  
翁新波津の旅泊よ病の急迫るれハ門人の誰彼  
池集りて良医と求んとまらしくなる時翁枕と奉







哀れ也。穠妻は悟ぬ人の言さよ此句を我に見  
のいせしめしり也。石火電光は猶鈍しと死の火急  
うらふと大悟して今やの時も覚悟して力のま  
たしんまうしうき振舞也。ありれよおこやうあん  
こそ風雅なるるれ穠妻は張臂見んハカのありて  
まこの正見といふへうしん穠妻のありく喜れし  
て淋しきくえくへきま正也たしく正見まらも  
形脱却せざる穠妻いゆと火宅まのしれは眼光落脱

乃其の正見とやいん

道を自在に至ておより来うよあし其人能其人  
と志す寶積禪師臨終の時門人の悟道を試ん  
いへ其時普化和尚末存より起て筋斗を打翻ひ  
俗に云ん不  
かりのゆ也は何まの事や悟るありや禪師答て普  
化は附屬とていへり  
翁が涯五十年花實一朝の嵐よ吹れて夏の  
こく泡のぬしけ嵐の心よ任せて却の花やうる地

辨





とさけて見る人も好き本居寺は其遺骨と納り  
没後其可くは所々たる経典文章抄を許六賞  
求て煙と焼く一あり其意をききむくへ  
流散て彼より一是とあり志く愚昧の口小評  
せしんを口と一は也人去速は流るきよと志り  
は誠は翁の志と能きなりと答へ一老子の  
語に上徳を徳とせし是以徳あり下徳を徳と失  
ははとて是以徳あり一されハ大徳を名りあり

香もれ一今の世の人と云くは能徳を以て却て名  
利の種と云くは故翁の本意と云くあり人  
を終は其大道と云くは能徳と藝のやうは是て上  
より下と批判して其心の至るいだらうと云くは  
其名れ世と一國一人よりて教れて一府の上より  
と好くして家門人と云くは物も記一巧言令色と云くは  
大欲を道の軍ありと云くは至極也  
故翁は前より七度の變化の前より他の業より一権

九一





と好んともまあ〜門人のまは一致して念  
着まゝのよ変化自在と導人と初て能諧と善悪  
不二門是非よか〜と示以後人誤て悪と  
して不二門といふ〜術を能くして是非よか  
〜の事とあり〜天地懸隔也舊來の悪よ着  
ま〜の速よ善よ移の事よ〜悪と不二門と  
捨たり能く僧來て問ふよ從來の罪ありや懺悔  
せん言曰汝ら從來の悪と尋て提來せよ此心ハ一ツク

其悪とよ〜提て持來れ〜其罪尋よ〜  
頗る大悟と示一僧來りて問曰おは罪ある時ハ是と  
佛よ懺悔してまぬら若其佛と〜潰さんよ  
よ向て懺悔と〜や言曰善也南來の悪と以て不  
二〜許さん

俳諧猿蓑炭俵の二集と能諧の古今集と稱して  
凡娑此二集小留りさると曲節とある〜二集の凡  
娑と古〜といふ類と故翁の能諧と破却するの天

此

此





魔より其罪許さへ〜此迄此の他諧と云ふ〜風情ハ  
語よかまひの勺の影〜さよと本意〜してひさす曲  
節と好む程ハ屏風の裏よりハち〜と逆さめよ立て是  
と影〜〜五器の尻よそ水と飲庵下よそ味嗜も  
ま〜ん雷木よそ物とき〜ん〜と〜る歎順と捨て逆とこ  
る影のゆく成り時と他諧の五箇八辨と云事迄此を  
傳授口変と號して價と取て是と許さめれあり其  
罪少〜〜故翁の昔前よ〜の沙汰と圓ハ他諧よ  
〜至れハおのつ〜備さめれ也五箇八辨の外ハ別の附  
方ろきぬ也五箇八辨より出〜る他諧よあ〜ハ他諧よ  
て後よ定〜る名ろり〜と〜  
近來殊勝ろり〜脚ハ〜と適〜る〜多〜ハ俳  
諧の糟よ酔て只放逸と風雅の大道と〜て理ろ〜  
て〜も貪〜意源〜ハ〜軍と艱難と經て是と浮  
世の終始と賞〜れハ嬌慢奢傲の心の盛〜して果ハ  
他のよ〜あ〜ま〜觸安ろ事と〜脚と〜賞た〜昔



和及法師のしる世徳の跡跡先くこそ蕉門と  
号し翁と冥暗の罪は落さんるの口惜し我を生涯  
の脚の思ひ絶らんとせん涙こそなき事也

昔西行梅尾へありて明恵上人の礼をうけ上人曰  
西行の世は圓及より殊勝の道心者あるよりされと月  
夜に海くらしく狂言綺語の和奇のそ好語なりと云  
ふしと宣ひし時西行曰たふさゆらぬ奇の塔  
真言うてゆき中されなき上人よと合て誤り感し

後より結さ人いふ新まてる新や

兼好法師の奇よ 友ありぬ人の訪来て長居を  
むらりありよりきひしりなきとらん我はむらりき  
凡雅の友なき事と歎き終り畢竟は物言へし  
むつし唯口を閉て心は雲外の友は求んるを志し  
彼法師の言葉こそ譽る人毀る人との世よとゆ  
らひ圓人又速よ去へしと人は悪せよと云ふあり  
は名とむらり人の為小いふ今此人俳諧と時く



のちやりとれやうはまへくちと道徳よろとさうか  
成魚一鬼も角もつ間よいつつせ常の風吹来り  
て死ふさうしされ死と以て風雅の終とつし時を  
死して後名も徳も更よ益を——皆妄想うて  
跡さうりね——此書も見去て後紙屑籠に納りて  
果と油古器の爲よ瘦犬の争うりて迷よ去漁

政多江糸を絶つてハ奉回——と末巻終  
りゆらつるり慮山人佛學のいもや傍  
蕉門の俳諧多様い其世れ仇証よ志  
を新記事にもしとれきとむを失氏  
子集のま——と紙たのまよて此撰あり  
々——とわ多思多邪の正語り  
とわ卵有毛の曲説をいひい

正



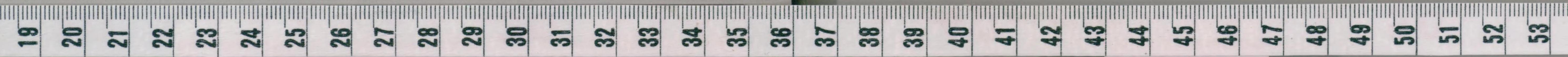
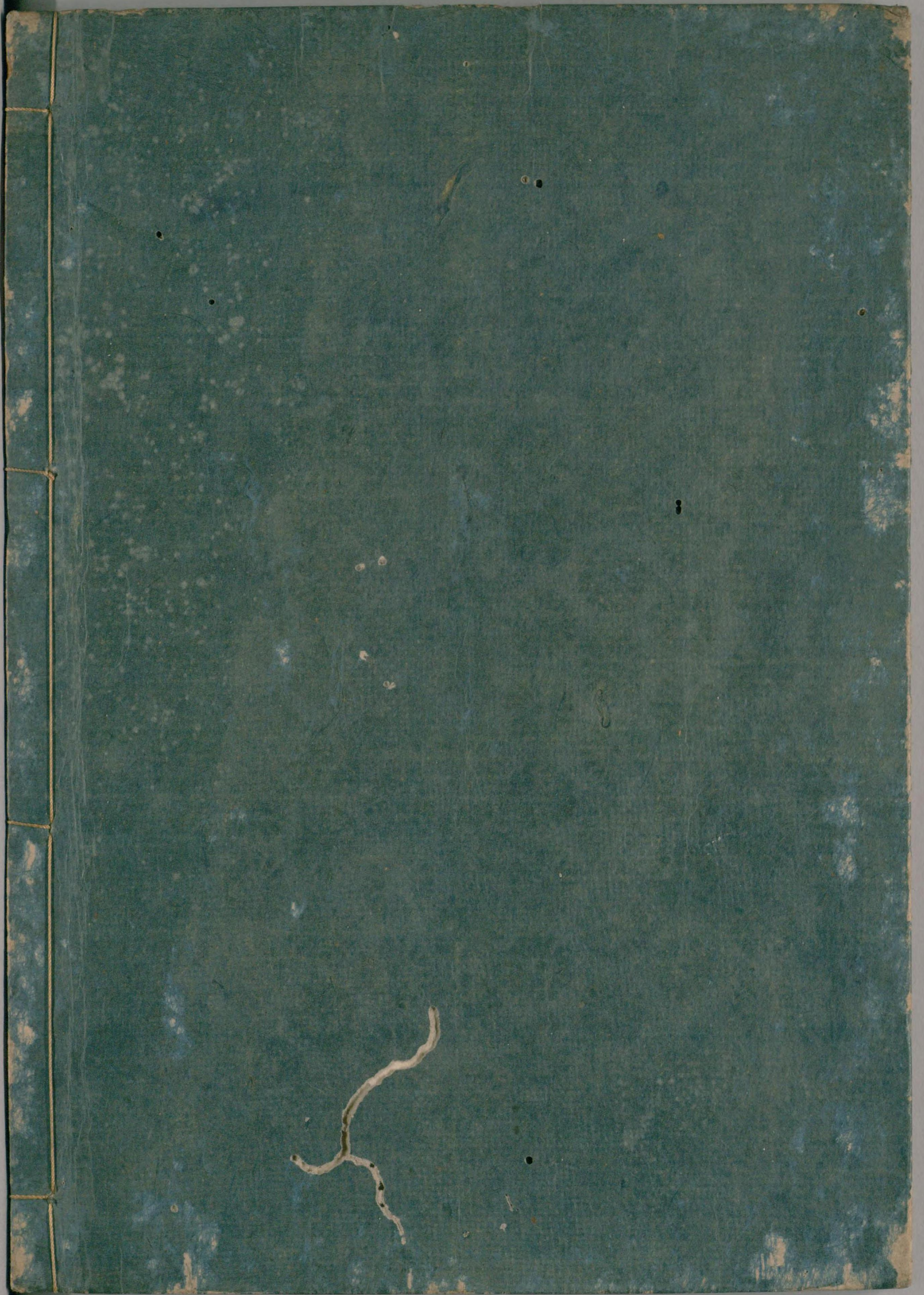
祖翁れちあふそくきふの  
かきしんふとんくふのふん  
又よく本業をくわんとめを故  
あまもくしんく人のはさし切あ  
か誰の仰るさしめや  
男文成跋



蕉門書林  
皇都寺町通三條  
橘屋治兵衛梓

863  
82





国立国会図書館 タイトル『俳諧正語抄』 請求記号 863-82

ガラス使用